

性質としての心の因果性

太田 雅子*

Causation of Mind as Property

OTA Masako

abstract

In order to vindicate the causality of the mental, the three principles "distinctness of the mental from the physical," "physical closure of causality," and "causal relevance of the mental" must hold coherently. However, one of the problems of mental causation is that these three principles contradict each other. According to David Robb, these principles can be reconciled by adopting the "trope theory" of property. The trope theory regards properties as "abstract particulars," and according to Robb, mental and physical properties differ in types, but mental tropes are identical with physical tropes. Mental properties as tropes can have causal relevance to physical events in virtue of this trope identity.

Cynthia and Graham Macdonald criticize Robb's view by demonstrating that the question "why mental property qua mental can cause anything" ("qua" problem) cannot be answered by investigating the nature of tropes. In addition to Macdonalds' criticism, I show another kind of difficulty in applying trope theory to mental causation. Since tropes are the particulars, trope theory is incompatible with our conception of causal explanation, which is essentially general.

Keywords : mental causation, property, trope, physical closure of causality, "qua" problem

物質からなる私たちの世界において心がどのようにして位置を占めることができるのかは、心に携わる哲学においては重要な問題のひとつである。一般的には、心は物質的な事物とは異なり非物質的であるかのように思われている。しかし、心の因果的能力について考える際に、何かを惹き起こす力を持つのは物質的なもののみであるという原則（物理的閉包性の原則）が大きく立ちふさがる。この原則に従えば、物質的でない心は世界に対して何の働きかけもなしえないように思われるばかりか、その存在自体も危ぶまれることになる。この状況においてなお心の存在を確保しようとするならば、心を何らかの形で物質的なものに還元しようとするか、あるいは、それ自体は世界に働きかけを行わず、一定の物理的因果過程に随伴して生じるだけであるという「エピフェノメナリズム」をとるかの選択を迫られる、というのが、近年の心の哲学が抱える難題のひとつである。

本稿では、デイヴィッド・ロブによって提案された、個別者としての性質を扱ういわゆる「トロープ理論」が、「心が因果的働きをもつことは可能か？」という、心的因果の問いの解決に有効であるかどうかを考察する。そして、トロープ理論が「心が（脳や神経などの身体的・物理的なものとしてではなく）心的なものとして行動に因果的に関与することができるのか？」という問いに十分な解答を与えることができず、また行動の因果的説明に関する私たちの素朴な考え方と合致しがたいがゆえに、トロープ理論の心的因果への応用に限界があることを示す。最後に、そのかわりにどのようなアプローチが可能かについて見解を示したい。

キーワード：心的因果、性質、トロープ、因果関係の物理的閉包性、「として」問題

*平成6年度生 比較文化学専攻

1. 心的因果 —これまでの解決法—

心的因果の問題がどのようにして生じるかを説明するにはさまざまな方法があるが、ここではロブによる定式化を見てみることにする。ロブによれば、心的因果の問題は、次の3つの原則が同時に成立しないことから生じる。

- (1) 心的性質は物理的性質ではない [異質性]
- (2) あらゆる物理的出来事は、その因果的歴史において物理的出来事および物理的性質のみをもつ [閉包性¹]
- (3) 心的性質は (時として²) 物理的出来事に因果的に関連する [関連性]

ここでの「物理的」という語は、行為や行動の身体運動としての側面を指す。これらの原則が成り立つことで、心身の因果関係がどのようにして可能かという問いに答えを出すことができるのである。しかし、(1) および (2) が正しいならば、心的性質は物理的出来事の因果的歴史に入ってこられないのだから、(3) は成り立たないように思われる。たとえばデイヴィドソンは、心的出来事と物理的出来事のタイプの違いに訴えて [異質性] を確保したものの、出来事の心的トークンと物理的トークンを同一視するトークン一元論をとったために、彼の立場は「心的出来事は心的なものとしては因果的役割を果たせない」というネガティブな帰結すなわち (3) の否定につながることになった。

(1) および (2) を認めたとえ (3) を成り立たせるためにデイヴィドソン自身も取り入れたのが、スーパーヴィーニエンスによる解決法である。ある出来事が物理的クラスに属する性質Pをもつとき必然的に心的クラスに属する性質Mをもち、なおかつPをもたずにMをもつことがありえないような関係にあるとき、MはPにスーパーヴィーンしている。そして、この出来事がたとえ心的出来事として個別化され、心的性質それ自体は因果的な力をもつことができなくても、その出来事は物理的性質Pによって因果的な効力を発揮することができる。

しかし、ロブはスーパーヴィーニエンスによる解決法の方向性の正しさを認めながらも、いくつかの難点を指摘する。第一に、たとえ心的性質の因果的な力が、それがスーパーヴィーンするところの物理的性質に負うものであったとしても、物理的でない性質が介入するならば、[閉包性] を斥けなければならなくなる。第二に、スーパーヴィーニエンスによってどうして心的因果が可能になるのかが明らかではない。この点については、「スーパーヴィーンする非物理的性質 (社会科学全般はもとより化学的、生物学的なものも含めた特殊科学に関わる性質) 一般の因果的効力は、その基盤である物理的性質から引き継がれるから」と説明するのが適切であるかに見える。しかし、あらゆる非物理的性質が [閉包性] によって原因としての身分を奪われかねない以上、心的性質以外の非物理的性質がスーパーヴィーニエンスの基盤である物理的性質から因果的効力を得られるのだから心的性質の因果的効力についても同じことが当てはまると主張したところで、心的因果についての不安が解消されるわけではない。

2. 個別者としての性質「トロープ」

心的因果の問題解決において「トロープ」なる存在者がどのような役割を果たすかを探るには、トロープとは何かを明らかにしなければならない。性質については、あるものの集まりに共通する何か、すなわち「普遍者」というものが存在するかどうかをめぐる論争が繰り返されたこともあったが、近年では、普遍者としてではなく、「個別者」としての性質の見方が注目されてきている。そして、この個別者としての性質こそが「トロープ」なのである。

トロープ理論が行うことは、まず性質の「普遍者」としての側面と「個別者」としての側面をともに認めることである。何本かのバラの集まりに共通して当てはまる赤色は赤色の「タイプ」であり、バラの一本一本に備わる色はそれぞれ赤色の「トロープ」である。「タイプ」と対置されるものとして「トークン」という形態があるが、「トークン」すなわち「トロープ」になるとはかぎらない。トークンが、ある性質を普遍者とした場合にその実例となったものを指すのに対し、それをある場所と時間において個別化したものがトロープなのである。バラの花束の中の任意の一本の色は赤色のトークンであるが、それを、このバラの花束を見ている今・この時点にお

ける色として限定するならば、それは赤のトローブとなる。

ロブは、1節で挙げた定式化(1)～(3)、つまり[異質性][閉包性]および[関連性]すべてを成立させるために、それぞれの原則における「性質」に二種類の読み方を与える。つまり、(1)での「性質」をタイプ、(2)および(3)での「性質」をトローブと見なすのである。このような修正を加えた後の各原則はそれぞれ次のような形になる。

- (1') (出来事の) 心的タイプは物理的タイプではない
- (2') すべての物理的出来事は、その因果的歴史において物理的出来事および物理的トローブのみをもつ
- (3') 心的トローブは(時として)物理的出来事に因果的に関連する

(Robb [1997], p. 188)

そして、このような読み方のもとで心的性質が行動の物理的性質に対して因果的関連性をもつようにするために、ロブは心的トローブと物理的トローブとの同一性を主張する (Robb [1997], p. 187)。この立場をロブは「トローブ一元論³⁾」と呼ぶ。(3')における心的性質つまり心的トローブと等しいような物理的トローブが存在するならば、心的なトローブは[閉包性]に違反することなく因果的役割を果たすことができ、それによって心的タイプに属する出来事は因果的な力をもつことができるようになる。

一方、心的タイプと物理的タイプは、たとえ心的トローブと物理的トローブが同一であったとしても依然として別のものでありうる。たとえば、痛みのタイプにはさまざまな痛みの個別的な性質(トローブ)が属している。それらのトローブは、それぞれに特定の物理的トローブと同一であるが、それらの物理的トローブはそれぞれに別々の物理的タイプに属することがありうる。人間にとって痛みと同一視できるのがC線維の興奮であったとしても、私たちと異なる構造の身体をもった生物では別の物理的状態によって痛みが実現されるかもしれないし、異星人ではまた別の物理的状態によって実現されるというように、ある心的状態を実現する物理的状態が複数あるという「多重実現可能性」も、痛みのトローブが同一であるところの物理的トローブが生物の種により異なるタイプに属することによって説明できる (Robb [1997], p. 188)。多重実現可能性は、心的タイプが物理的タイプとは異なるから、すなわち[異質性]が成り立つからこそ生じるのだ。

ここでひとつ注意しておかなければならないのは、心的トローブそのものが因果的効力をもつわけではないということである。心的トローブが実際に何かの性質を生じさせる力をもつのだとしたら、それは[閉包性]に背くことになる。心的トローブはむしろ結果の発生に何らかのしかたで「因果的に関連する」のである。

「惹き起こす(因果的効力をもつ)」と「因果的に関連する」との違いは、因果関係をどのような観点から捉えるかによる。「惹き起こす」が「何が結果を生じさせたか」のみにかかわるのに対し、「因果的に関連する」のほうは、それに加えてなぜ・どのようにして結果が生じたのかという疑問に答える働きをする⁴⁾。ビールが飲みたくなって冷蔵庫のほうへ歩いてゆくとする。「ビールが飲みたいと思う」という欲求の内容(心的性質⁵⁾)は、なぜ行為者が冷蔵庫のほうへ歩いていったかの理由を与えるという意味で「因果的に関連する」が、実際にその行動を「惹き起こす」のは、「ビールが飲みたいと思う」という欲求のもととなる脳と神経の状態(その欲求の物理的性質)である。

デイヴィドソンの立場をはじめとする、心を物理的なものに還元しない物理主義(非還元的物理主義)は、出来事を心的なものとして特徴づける役割と、因果的効力をもつという役割を同じ「性質」という存在者に担わせてしまったがために、ロブの定式化で言うところの[閉包性]か[関連性]のいずれかを放棄せざるを得ないような選択を迫られることになった。それに対してトローブ一元論は、出来事の心的特徴づけをタイプに、実質的な因果的役割をトローブに分担させ、[異質性]も含めた3つの原則がともに成立することを可能にする。そして、トローブ一元論は、同じ結果に対する原因として心的性質と物理的性質とが関与するとき、後者のみで結果が起こるのに十分であるなら前者は原因としての資格を奪われてしまうおそれがあると警告する「因果的排除問題」(Kim [1998], pp. 37-8)にも対処できる。心的トローブと物理的トローブが同一の存在者であるとするならば、あるものが(性質であれ何であれ)それ自身と因果的な力を争うことがありえないとして、この問題を無害化できる。もちろん、心的トローブと物理的トローブが同じだからといって、それらが性質として同じであるわけではない。属するタイプが異なれば、性質としては別々に個別化されるので、心的トローブと物理的トローブの

同一性は還元主義にはつながらない（よって「異質性」が成り立つ）。トロープ一元論によって、還元主義に頼らなくても心的な性質の因果的な働きを保証することもできるし、心的な性質をエピフェノメナとして因果的なプロセスから切り離さなくても、因果的な側面での心の独自性を守ることが可能になるのである。

3 トロープ理論の問題点 (1) —マクドナルドによる批判—

物理主義的想定のもとで心的因果の成立を目指す者にとって、トロープ一元論は救いであるように思われるかもしれない。けれども、トロープによって心的因果をめぐる困難が解消されるのかどうかを見極めるためには、二つの方向から問題を考える必要がある。一方では、心的トロープと物理的トロープが「同一である」というのはいったいどういうことなのかを明らかにし、その上で両者の同一性が心的因果の問題解決に進展を与えるかどうかを見てゆく方法がある。つまり、ロブの主張をいったんは受け入れた上でその是非を問うやり方である。そしてもう一方では、トロープ理論が心的因果を立証するというアイデアそのものを直接に批判する方法がある。以下ではそれぞれの方法からトロープ理論の問題点を探ってゆきたいと思う。

心的な性質が因果的な力をもちうるかを考えるときに避けて通れない、ロブ自身も意識していた問題がある。それは、トロープを導入してもそれが心的なもの“として”因果的な力を発揮できないのなら、それは果たして心的因果にとって有用なのかどうか疑問視されるかもしれないという問題である (Robb [1997], p. 190)。心的なトロープは物理的なトロープと同一であることによって何かを惹き起こすのに関与する。それは、心的出来事が心的なものとしてではなく物理的なものとしてはじめて因果的な作用をなしうるのなら、心にほんとうの因果的な力が宿っていることにはならないのではないかというデイヴィッドソンの立場に対する批判を思い起こさせる。因果性の担い手を出来事からトロープに変えても同じことが当てはまるなら、トロープは心的因果の問題解決に何の役割も果たしていないのではないか。

このような問題をロブは「“として”問題」と呼び、出来事について“として”問題が発生したとしても、トロープに関して同じことは当てはまらないと述べる。出来事はさまざまな性質をもち、それらは出来事が生じた状況や文脈により因果的に関連したりしなかったりする。ゆえに、「出来事のどの性質が結果に対して因果的関連性をもつか？」すなわち「出来事はどのようなもの“として”原因となるのか？」と問うことには意味がある。けれども、心的トロープは性質そのものであり、現にそれ自体で結果に対して何らかの因果的関連性を担っている。ここまでのロブの議論を認める限りでは、心的トロープが心的なものとして因果的関連性をもつことは自明であり、トロープの何が結果の発生に関与するのかを問うても無意味なように思える。出来事について生じる“として”問題を性質に持ち込むのはカテゴリーミステイクであるとロブは述べる (Robb [1997], p. 191)。

もっとも、ロブの議論は心的トロープと物理的トロープとの同一性から出発して原則 (1) ~ (3) が成り立つと述べているわけではない。順序はむしろその逆で、(1) ~ (3) が互いに矛盾なく成立することによって、心的トロープと物理的トロープの同一性が確立される (established) のだと述べている (Robb [2001], p. 94)⁶。しかし、トロープ一元論が心的因果の問題解決に成功しているか否かの鍵を握るのが心的トロープと物理的トロープとの同一性である以上、それらがいかにして、どのような形で同一でありうるのかを理解しておかないと、心的因果の議論におけるトロープ理論の有効性を評価することはできない⁷。

シンシア・マクドナルドとグラハム・マクドナルドは、性質としてのトロープの位置づけには二つの考え方があがるが、そのどちらをとったとしても、心的トロープと物理的トロープの同一化は、心的性質の心的なもの“として”の行動への因果的関与を立証できないと述べている。性質は「トロープ」そのものを指すこともあれば、「トロープのクラス」を指すこともあり、この意味ではトロープ理論における「性質」は二義的である。先ほど例に挙げたバラの花束でなぞらえると、1本1本のバラがもつ色のトロープそのものを性質とすることもできれば、花束となったバラに共通する特徴で形成されるクラスを性質と見ることもできる。先に紹介したロブの議論では、性質は個別者としてのトロープそのものであったが、まず、性質をトロープのクラスと見なした場合のトロープ一元論の問題点を先に見てゆくことにする。

この見方によれば、「心的トロープと物理的トロープが同一である」ということは、「心的トロープが、心的なものクラスのにも物理的なものクラスのにも属する」ことを意味する。どちらのクラスも、何らかの類似点をも

とに形成されている。たとえば、あるものが水に溶けるという性質（水溶性）は、それが特定の分子構造をもつ、たとえばXYZという分子構造をしているというものであるとしよう。「水に溶けるという性質のトロープが分子構造XYZをもつという性質のトロープに等しい」というとき、それが意味するところは、当のトロープが水に溶けるもののクラスに属すると同時に、分子構造XYZをもつもののクラスにも属するということである。けれども、この見方を心的トロープに当てはめると、心的なトロープが物理的なクラスに属することによって因果的な力をもつと述べているに過ぎず、心的なトロープが心的なものとして何かを惹き起こす役割を果たせるかどうかについては何も述べていないに等しい（Macdonald [2006], pp. 549-54）。

今度は、ロブが主張したとおり、トロープが個別者としてそれ自体で因果的な働きをするかどうかを考えてみる。ある出来事 c が出来事 e を惹き起こすとする。 c は M_i という心的性質トロープをもっていると同時に、 P_j という物理的性質トロープをもっている（ M_i と P_j は、それぞれ心的なもののクラス M および物理的なもののクラス P のメンバーである）。けれども、「 c が M_i をもつこと」という出来事が「 c が P_j をもつこと」という出来事と同じものであるなら、出来事 e を生じさせたのが M_i なのか P_j なのかは、 M_i および P_j の本性をいくら調べたとしても決着がつかないだろう（Macdonald [2006], pp. 554-9）。マクドナルドらの診断では、性質をトロープのクラスと見る考え方では、心的性質は物理的性質に原因としての地位をゆずることになり、トロープを個別者として見る立場では、心的なものの因果的な力を積極的なしかたで主張することはできない。いずれにしても、トロープ理論は心的因果の問題解決を前進させないのである。

4. トロープ理論の問題点（2） — “として” 問題のもうひとつの困難 —

今度は第二の方法での批判を試みよう。まず、“として” 問題についてであるが、マクドナルドらとはまた異なる形で疑問を提起することができる。ある心的なものが物理的なものと「同一である」と言われるとき、その性質についての素朴な見方は、「それが心的側面と同時に物理的側面をもっている」というものだろう。そしてこのことは、性質そのものであるトロープにも当てはまるように思われる。ある心的トロープが何らかの物理的トロープと同一であるならば、そのトロープは心的側面と同時に物理的側面をもつという見方は正しいだろうか。

ロブの立場からすれば、この見方は誤解であるように思われるかもしれない。心的トロープはある時点・ある場所における個別的な心的性質そのものであり、物理的側面をもつことは考えられないだろう。しかし、トロープの個性は、同一性一般についての素朴な見方と食い違ってしまう。心的側面そのものであるはずの心的トロープが、〔異質性〕の原則を認めるならば）どうして心的なものとはまったく別の側面そのものである物理的なトロープと同一の存在者になりうるだろうか。

「ある心的トロープが何らかの物理的トロープが同一であるならば、そのトロープは心的側面と同時に物理的側面をもつ」が意味するのは、「あるトロープが心的なタイプに属するときには必ず何らかの物理的タイプに属している」ということだと考えれば、トロープの個性を保持しつつ心的トロープと物理的トロープの同一性を主張できるかもしれない。しかし、このように考えるならば、あるトロープが何らかの心的タイプに属することによってなぜ行動に対して因果的に関与できるのか、そして、そもそも何らかの心的タイプに属することが行動を惹き起こすために必要なかが問われるだろう。私がのどの渴きを感じて冷蔵庫に飲み物を取りにゆくという行動を考えてみる。私がのどの渴きを感じるという心的状態をトロープとして個別化可能だと想定してみよう。私がもつどの渴きトロープは、さまざまなどの渴きに共通した心的タイプに属している。そして、そのトロープは何か物理的なタイプ、たとえば水分を摂取させるような脳の働きに共通したタイプにも属している。けれども、私が飲み物を取りにゆくという行動は物理的であり、〔閉包性〕を認める限り、それを惹き起こせるのは物理的なものでなければならない。今の場合だったら、のどの渴きを感じたときの私の脳状態でなければならないだろう。これまでの物理主義者たちの見解によれば、私がもつどの渴きトロープが飲み物を取りにゆくという行動に因果的に関与できるかどうかを左右するのは、それがどのような物理的タイプに属するかであり、どのような心的タイプに属するかではないということになる。それでもあえて「何らかの心的タイプに属することによって行動が生じるのだ」と主張したいならば、私のどの渴きトロープが、心的なものとしてなぜ私に飲み

物を取りに行かせるのかについて、物理主義者が納得するような説明を用意しなければならない⁸。これでは議論は振り出しに戻ってしまう。

ロブを試してみれば、トローブ自体が単独で因果的関連性をもつのであり、それ以外に因果性の担い手を探しようがないのだから“として”問題は問題ではないということになるだろう。けれども、マクドナルドらの分析によると、トローブ理論は依然として“として”問題に悩まされる。“として”問題が問題にならないのだとすれば、それは答える必要がないからではなく、答えようがないからであると言える。

5. トローブ理論の問題点 (3) 一行動の因果的説明とのかかわり一

さらに問題となるのは、トローブとしての心的性質のあり方が、私たちの素朴な心の見方と、特に行動の心的説明についての考え方と相容れないという点である。私たちは、行動の説明にしばしば心的状態を引き合いに出す。「なぜこんな夜中に冷蔵庫を開けたりするのか？」と尋ねられたら「のどが渴いたから」と答えるだろうし、心の状態に言及したこの答えは説明として誰もが納得するものであるだろう（納得できない点があったとしても、心の状態による説明だからという理由ではない）。心の因果性を哲学的に立証することの意義の少なくともある部分には、このような日常的な説明の適切さを確かなものにしたという動機があるように思う。もし心的性質がなぜ行動に因果的に関与するのかの理論が立てられるならば、それは私たちの日常的な行動の説明が因果的な要素を含みうるという素朴な直観になじむものであることが望ましい。

だが、トローブによる心的因果の理論は、どれほど形而上学的には画期的であっても、行動の説明を因果的にとらえる見方になじむとは思えないのである。ある行動を説明するのにどの心的状態を援用するのが適切かを判断する目安となるのは、当の心的状態と行動との間に何らかの法則的なものが、因果法則とまではゆかなくても「たいていの場合 A が起これば B が起こる」という趣旨の一般化が成り立つかどうかである。夜中に冷蔵庫を開けて飲み物を取り出す私の行動も、「のどの渴きを感じれば人は飲み物を探すものだ」ということが一般化されているからこそ、のどの渴きによって説明できるのである。しかし、トローブとはあくまでその場かぎりの個別の心的性質であり、たとえ心的なトローブが個別者として因果的に関連しうることが示され、そのような心的トローブの事例が一定数集められたとしても、それだけでは行動の（心的なものによる）因果的説明に根拠を与えることはできない。因果法則や一般化は、もののタイプに基づいてたてられる。トローブ理論が因果法則や一般化にも応用できるようになるためには、やはりタイプへの言及が不可欠であるが、法則や一般化の成否を左右するのがタイプであるならば、トローブ理論の心的因果への応用がどれほど有効なのかは疑問に思えてくるのである。

6. 心的因果の可能性 一結論に代えて一

トローブ理論は、私たちの心的因果の理解を形作る3つのテーゼを矛盾なく成立させることを目指したものである。しかし、ここまでの考察により、心的トローブと物理的トローブとの同一化のみならずトローブという性質のあり方自体が心的因果の問題解決には有効でないことが示された。

ロブは、[異質性][閉包性]そして[関連性]の3つの原則の相互矛盾を避けるために心的トローブと物理的トローブの同一性を必要としたのであり、それ以外に両者を同一視せざるをえなくさせるような積極的な根拠は提示されていない。ということは、トローブに頼らずにそれらの原則をすべて成立させる見込みがあるのだとすれば、そちらの方向を検討してみるのもひとつの手である。

物理的なものを何ら含まない心という存在者がそれ自体独立に何かを惹き起こすというデカルト的二元論に戻らないのであれば、心的性質の因果的な働きを擁護するためには、何らかの形で物理的なものと接点をもつ必要がある。しかし、その場合、心的なもの独自の（心的なものとしての）因果性は、[閉包性]に裏打ちされた物理的原因の優位性によってはね返されてしまう。何人かの論者によって提案されているのは、なるべく穏便なバージョンの[閉包性]を採用することでこの困難を切り抜ける方法である。

[閉包性]の原則には二つの読み方が可能である。ひとつは、単に結果の因果過程の中に物理的原因があることを示唆するだけのものであり（[閉包性 (a)]と呼ぶ）、もうひとつは、原因の候補を完全に物質的なものに限

定する読み方である（こちらは「閉包性 (b)」とする）⁹。「閉包性」としてどちらの解釈をとるかで、心的な原因が排除されるかどうかが決まってくる。

ロブとマクドナルドはいずれも「閉包性」に言及しつつ論を進めているが、実は両者の間には、この点に関して微妙だが重要な違い¹⁰が見られる。ロブの定式化における「閉包性」は原因の候補を物理的なものに完全に限定しているので「閉包性 (b)」に相当するが、マクドナルドの「閉包性」とは「物理的出来事または現象が原因をもつならば、それは十分な物理的原因をもつのであり、その物理的性質は結果に対して因果的に十分である (Macdonald [2006], p. 546)」というものである。マクドナルド版の「閉包性」は、ある結果に対してそれを惹き起こすに十分な物理的原因の存在を示唆するのみで、物理的性質のほかに因果的にかかわると見られる心的性質があっても、それが物理的性質に何らかの形で依存するか同一化される場合は因果的排除の対象になるとは言い切れない（その点においてマクドナルド版の「閉包性」は「閉包性 (a)」に分類してよい）。それに対して「閉包性 (b)」は、心的性質がどのような形で物理的性質に依存するのであれ、それが結果の発生に因果的に関与することを否定する。「閉包性」の解釈として「閉包性 (b)」を拒けるか、「閉包性 (a)」をとった場合でも因果的排除問題と結びつかないようにする、というのが、物理主義者の批判への対策のひとつであり、ロブが掲げた3つの原則を矛盾なく成立させることにもつながる道である。

しかし、この方法で可能なのは、せいぜいのところ心を因果的に排除させないようにするくらいであり、それ以上に積極的な心的因果の裏づけを提供できる見込みがあるとはいえない。もし心的性質が、スーパーヴィーニエンスやマクドナルドが提案した出来事存在論に基づいた因果図式¹¹のような、物理的性質に依存する形で心的なもの因果的関連性を保持することができたとしても、実際の因果的役割が物理的性質なり出来事に帰着するかぎり、心的なものは余剰ではないかという疑惑は残ったままである。このことは、心的因果の存在論的・形而上学的なアプローチの限界を意味するように思われる。心的因果の立証に残された手がかりのひとつは、私たちがおおむね因果的であると見なしている、心的なものに言及した行動の説明にある。もし、いかにしてそのような説明が可能なのか究明されれば、そこから出発して心の因果性ひとつの見方を提示できるかもしれない。これは現段階では希望的観測にすぎないが、今後追究してゆくべき課題ではある。

註

- 1 「閉包性」を「物理的性質のみ」と記述するかどうかは心的因果の成否を大きく左右することになる。というのも、「のみ」がなければ、この原則は「(心的因果の有無とは関係なく)とにかく物理的原因がありさえすればよい」と解することができ、その場合は心的な原因は必ずしも排除されないからである。この問題は6節で詳しく取り上げる。ここでは、「閉包性」を、ロブの定式化に従って「のみ」を含むものと見なすこととする。
- 2 このような限定がなされているのは、(2)の原則より、物理的なものに因果的に作用しうるのは物理的性質のみであるのが通常であるということが前提されているからである。
- 3 ここでの「一元論」は、「因果性を担うのは物理的な存在者のみである」という、二元論と対置される通常の用法よりは弱い意味で用いられている。
- 4 たとえば、台風10号の被害によって多くの人が体育館に避難したとする。台風10号の上陸は毎朝新聞の一面で伝えられ、被災者の避難は翌日の経売新聞の三面に掲載された。このとき、「毎朝新聞の一面の出来事が翌日の経売新聞の三面の出来事を惹き起こした」という文は、因果関係を述べたものとしてとらえれば、奇妙に思われるにしろ誤りではない。「毎朝新聞の一面に掲載された出来事」および「翌日の経売新聞の三面に掲載された出来事」は、「台風10号の上陸」「被災者の避難」という出来事をそれぞれ別の記述で表したものである。けれども、この文が成り立つからといって、毎朝新聞の一面に掲載されたことが翌日の経売新聞の三面に掲載されたことに対して因果的関連性をもつことにはならない。台風10号の上陸が毎朝新聞の一面に載ったことは、なぜ多くの被災者の出現が翌日の経売新聞の三面に掲載されたのかを説明するわけではないからだ。これは出来事の「記述」の側面からの説明であり、言語表現の一種である記述に関することをそのまま性質に当てはめるには慎重でなければならないが、記述が取り出すのはたいていにおいて出来事の性質であることから、記述による因果的関連性の話をそのまま性質に当てはめても差し支えないと考える。
- 5 厳密には、信念や欲求そのものとしての性質とその内容的性質とは区別する必要があるが、物理的性質はこのような状況を意味する内容をもたず、内容的性質をもつことは心的性質であることの重要な目印になるという点で、ここでは心的性質に含めることにする。
- 6 柏端の表現を借りるならば、この同一性は「形而上学的に要請される」ものである (柏端 [2007], p.109, pp. 114-5 注 (19))。
- 7 柏端 [2007]p. 109 でも同様の疑義が提出されている。この点に関しては、マクドナルドらがわかりやすい見取り図を示しているので、

この後でとりあげる。

- 8 トロープ理論の代案としてマクドナルドらが提案している立場はそのような説明の一種と見ることができる。彼らの方策は、心的および物理的出来事をそれぞれの性質の実例とし（このことは「出来事が性質を例化する (instantiate)」と呼ばれる）、ある出来事が心的性質を例化するのはそれが何らかの物理的性質を例化することによってであるとするものである（ゆえにその心的出来事の因果性も、それが例化した物理的性質に左右されることになる）。しかし、この方法も、心的出来事が因果的であるゆえんをそれがもつ物理的性質に求めている点で、物理主義者側からの「“として”問題」の提起に耐えうるとは言い切れない面がある。
- 9 キム自身は閉包性を「物理的出来事の因果的祖先または子孫をたどっても物理的領域の外へ連れ出されることが決してない。すなわち、いかなる因果連鎖も物理的なものと非物理的なものの境界を越えることはない」と定義するが (Kim [1998], p. 40)、この引用における「すなわち」の前の部分は、必ずしも物理的領域以外に通じる因果的ルートの不在を意味するものとはいえない。Crisp & Warfield [2001], pp. 305-8 および Marcus [2005], pp.31-2 では、キムのスーパーヴィーニエンス論法で前提されている閉包性が、[閉包性 (a)] から [閉包性 (b)] へなにかば意図的に強められているのではないかという指摘がなされている。
- 10 両者における [閉包性] の内容の相違によって、心的性質の因果的関連性への対処のしかたは分かれてくるが、トロープに対する見方の相違にはつながらない。ロブとマクドナルドの見解は、たまたま [閉包性] とトロープの捉え方において異なっているが、それらの違いの間自体に関連があるわけではない。
- 11 註 8 参照。

参考文献

- Crisp, T. M. & Warfield, T. A. [2001], "Kim's Master Argument," *Noûs* 35, pp. 304-16.
- Davidson, D. [1970], "Mental Events," in *Essays on Actions and Events*, New York: Oxford University Press, 1980, pp. 207-24 (『心的出来事』、服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』所収、勁草書房、1990年)。
- 柏端達也 [2007], 「心的な因果性と古くて新しい存在論 —トロープはどのような場で活躍できるか—」、『意識と感情をもつ認知システムについての哲学的研究』平成16～18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書(研究代表者・柴田正良)、pp. 106-17.
- Kim, J. [1998], *Mind in a Physical World*, Cambridge: MIT Press (ジェグウォン・キム『物理世界のなかの心』、太田雅子訳、勁草書房、2006年)。
- Macdonald, C. & G. [2006], "The Metaphysics of Mental Causation," *Journal of Philosophy* 103, pp. 539-76.
- Marcus, E. [2005], "Mental Causation in a Physical World," *Philosophical Studies* 122, pp. 27-50.
- Robb, D. [1997], "The Properties of Mental Causation," *The Philosophical Quarterly* 47, pp. 178-94.
- Robb, D. [2001], "Reply to Noordhof on Mental Causation," *The Philosophical Quarterly* 51, pp. 90-4.

(2007年12月1日受理)